

「いじめ」～家にも学校にも居場所がない～

- 仮名：Kさん
- 年齢：30歳
- 性別：女性

【家族の中のいじめ】

Kさんは、物心ついた頃から高校に入るまでの間、父親から性的虐待を受け続けるという過酷な環境の中で育ったことを泣きながら話し始めた。母親はKさんに対して異常なまでに過干渉とネグレクトを繰り返したという。Kさんには2つ年上の姉がいて、姉はよく気が利き勉強もできた優等生だったため、「どこに出しても恥ずかしくない娘」と評判だった。そんな姉とKさんは随分と比較され蔑まされて育ったという。家庭の中ではいつも不機嫌そうに振る舞う母親と、酒を飲んで暴れて手が付けられない父親の世話をする毎日だった。父親は、酔うと必ず「お前は学校なんか行かなくていい。一生、親の面倒をみる。」と口癖のように言っていた。そんな不安定で混乱した家庭の中にはKさんの居場所がなかったという。しかし、Kさんには中学時代から続いていた陸上があった。それだけが唯一の居場所だった。Kさんは競技を続けるため、県内でも有名な私立高校へ入学する。中学時代から期待のエースとして注目されていた彼女は、高校入学後すぐに陸上部に入部し、得意種目で県大会予選を勝ち抜き、県代表として選ばれるほどの活躍ぶりだったという。

【家にも学校にも居場所なんてない】

しかし、そんなKさんに転機が訪れる。高校2年の時、Kさんの父親が事業に失敗。借金を背負って会社は倒産した。念願叶って入学した高校も、学費が払えなくなり退学せざるを得なくなった。Kさん一家は県外に引っ越すことになり、同時にKさんは県外の公立高校に編入することになった。しかし、田舎の高校では都市部から転校してきたKさんの活躍ぶりや評判はすぐに広まり、Kさんは一躍有名人になった。そんなある日のこと。Kさんが朝登校すると、下駄箱にあるはずの上靴がない。仕方なく、学校のスリッパを借りて一日過ごす事になった。この日から、Kさんを取り巻く状況が一変する。昨日まで仲の良かったクラスの部活仲間。昼休みには6~7名の仲間と一緒に机を合わせて弁当を食べていたが、突然、Kさんが輪に加わろうとするのを排除し、話しかけても無視し始めたのだ。それ以来、Kさんは他のクラスメイト達からもすれ違い様に「調子に乗んな」「キモイ」「暗い」などと、聞こえるように言われるようになった。Kさんは次第に学校へ行く意味がわからなくなり、イジメに加担する部員だけの部活にも行けなくなった。次第に学業にも意欲がなくなっていったという。

【寂しさと摂食障害の始まり】

同じクラスの部活仲間が全員イジメに加担し、他に相談できる友人は一人もいない。親に話したところで「いじめられるお前が悪い」と言い返されるのがオチだと覚った。この頃から、Kさんは学校へ行っても一日中、誰とも話せず孤立していく。休み時間、移動教室の際、修学旅行もすべて一人だった。表面上、加わったのはグルーピング(班編成)を決めるときだけ。実際の旅行先ではどこのグループにも入れず、教師も見ても見ぬふりを貫いた。Kさんは担任に勇気を出して苦しい現状を相談した。「どうにかして、みんなと仲良くしたいです」一。しかし、担任から返ってきた言葉は「あなたにも原因あるよね」だった。勇気を振り絞って相談したにもかかわらず、担任からの言葉に再び絶望と不信感を抱いた。家の中にも学校にも、自分を理解してくれる人が一人もいないことに変わりはなく、Kさんは現実逃避で紛らわせるしか過ごし方がなかった。下校途中にコンビニで買ったパンや弁当を抱えて部屋に入り、好きなバンドやアイドルグループのライブDVDを見ながら、一人で黙々と食料を食べることに没頭した。その瞬間だけはやり場のない悲しさや苦痛を忘れることができたという。それは、精神的不安定でネグレクトや過干渉を繰り返す母親のこと、父からの虐待のことも同様に。それから、Kさんは遅刻・早退を繰り返すようになり、学校が終わると食料を買い込んで帰宅。そそくさと部屋にこもって食料を食べまくった。足りなくなると、両親のいない隙に冷蔵庫の中の食べ物をひたすら食べまくる。そして、家族が寝静まった頃を見計らってトイレに行き、食べたものを一気に吐く。これがKさんの人生に於ける過食嘔吐の始まりだった。 一つづく一